

【斑鳩】いかるが

斑鳩＝鶇[いかるが]はスズメ科の鳥。奈良県生駒郡斑鳩町はその鳥が群生していたところから付いた地名といわれています。

この地に世界最古の木造建築、聖徳太子＝厩戸皇子(574～622)ゆかりの法隆寺があることは皆さんご存知のとおりです。付近にはその他、中宮寺・法輪寺・法起寺など歴史ある寺々が点在しています。

法隆寺は文化財の宝庫であり、歴史・美術史・建築史に関わる研究の対象となってきた寺です。ことに明治中期から始まった法隆寺再建・非再建論争は研究の方法を飛躍的に発展させた論争となりました。

この論争は『日本書紀』の天智九年(670)四月三十日の条に「夜半之後に、法隆寺に災けり。一屋も余ること無し。大雨ふり雷震る」とある短文が史実か否かということから始まりました。

法隆寺は金堂・五重塔を中心とした西院と、夢殿でお馴染の東院に大別できます。

世にいう現存する最古の木造建築とは西院のことで、再建・非再建論争も西院を対象とします。

『日本書紀』の記載が史実ならば、法隆寺は天智九年に火災で全焼し、現在の西院伽藍はそれ以降に再建されたものということになります。論争の経過は略し結論だけを述べれば、昭和十四年に現法隆寺西院伽藍の東南に更に古い様式の瓦と伽藍跡(若草伽藍)が発掘され、現法隆寺西院は再建された建物であることが明らかになりました。(再建であっても現存する世界最古の木造建築です)

但し、西院伽藍は誰がいつ再建したのか。金堂本尊の釈迦三尊像は聖徳太子の時代のものであり、再建法隆寺にどうしてあるのか、など未解決の問題は今も残っています。

仏像を信仰の対象としてではなく文化財・美術品として調査・鑑賞する試みは明治時代フェノロサ・岡倉天心らによって提唱され、近代的な美術史研究の萌芽となりました。法隆寺の論争は当時の美的印象論による美術史を脱し、証拠を重んじる実証的美術史が育つ契機となったのです。

法隆寺といえば聖徳太子を連想し、多くの方が旧 1 万円札の肖像を思い浮かべることでしょう。原画は法隆寺旧蔵、現在宮内庁所蔵の御物です。

あの肖像画を聖徳太子像とした古記録は平安時代末期、大江親通の『七大寺巡礼私記』が最古です。それ以前の古い記録は『資材帳』にすらなく、平安時代末期までに外部から寺に納められたようです。

他の聖徳太子像とはあまりにもかけ離れた像容で、本来聖徳太子像であるかどうか疑わしいものです。

唐風の様式から察して平安初期までに描かれたモデル不詳の画を後に法隆寺に納め、〈聖徳太子画像〉としたものと思われます。作者やモデルに関する様々な説はその後の俗説に過ぎません。

さて、聖徳太子は何がそんなに偉いのでしょうか。

八人の訴えを同時に聞きそれぞれに応えたという伝承は平安時代の『聖徳太子伝暦』所収の話で

す。後世の聖徳太子信仰の産物で史実とはいえません。

中学校の歴史教科書に、推古天皇の摂政・十七条憲法・冠位十二階の制定とありますがこれらは全て奈良時代の『日本書紀』の記載によるもので、飛鳥時代に摂政という役職があったことも、憲法が施行されたことも確認できず、当時の政治状況からしても極めて不自然と多くの専門家は口をそろえています。

また、厳密に言えば冠位十二階が太子の制定とは『日本書紀』にも書かれていません。

では彼の確実な偉業は何なののでしょうか。

彼は三経義疏(法華経 勝鬘経 維摩経の注釈書)を著しています。勿論この点も真偽をめぐって議論はありますが、少なくとも彼の周辺には高麗僧惠慈・百濟僧惠聰など渡来した僧が集い仏教哲学を研究していたことは確かなようです。

当時、仏教教義を本格的に理解できた和人は稀で、そのため太子は生前から尊敬され、死後すぐに神聖化されました。

彼の死後、大化の改新を経て中央集権国家の形成が進み、仏教の主導が氏寺から官寺に移る奈良時代には、仏教を擁護した先駆者として太子の偉人像が出来上がったのです。彼が皇族であったことも国家仏教には好都合だったのでしょう。

ちなみに、『日本書紀』によれば太子は馬屋で生まれたと記されています。どこかで聞いたような話ですよ。これは唐の国に景教(キリスト教ネストリウス派)が伝来しており、異国の貴種出生譚に習ったものと考えられます。

現在、斑鳩付近は景観を守るため高い建物は建てられません。建物の色は朽ちても空の広さは飛鳥時代のままなのですね。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~